

「臨床検査データブック 1999-2000」

自治医科大学学長 高久 史麿 監修
 東海大学医学部長 黒川 清 編集
 神戸大学医学部教授・第2内科 春日 雅人
 東京大学医学部助教授・臨床病態検査医学 北村 聖

慶應義塾大学医学部教授・中央臨床検査部

渡 辺 清 明

臨床検査の進め方、データの読み方を書いた本は多くあるが、日常診療の現場に即した本はなかなか得難い。本書はこの欠点を埋め、日常診療に大変使いやすいように構成され、内容豊富な検査書の割には小型(B6判)で、いつも手元に置けるハンディな本である。今までにない診療に役立つ臨床検査の本を作成しようとする編者の意図が伝わってくる感じである。

今回は初版(1997-1998年版)に続く第2版(1999-2000年版)であるが、その基本コンセプトが変わっていないのが嬉しい。

今度の改訂版では、特に無駄のない効率のよい検査の選択の仕方に主眼が置かれ、適切な検査計画が一見してわかるようになっている。例えば、呼吸器系、循環器系などの疾患別に初期診療時の基本検査(第一次スクリーニング検査)が表中に示さ

れ、その結果をみて次に診断へ進む過程が図示されており、専門外の臨床医にとっても最新の適正検査が依頼できるようになっている。

これは近年の保険医療制度で検査の包括化が進む中で臨床医にとって非常に重要なことである。検査を標準最小限にとどめることは患者に対してのみならず医療経済的にも大変必要なことだからである。今後の医療に求められる大切なことをいち早く臨床検査の解説書に取り入れた点はまさに慧眼と言える。

検査計画の中に臨床検査のみならず画像診断なども取り入れて総合的に検査を進めるように記載されている点も大変親切である。“各論”では700以上の多くの検査項目が掲載されているが、1つ1つが非常に簡潔平明に解説されており、多忙な診療中でも十分使えるようにできているのは驚きである。また、各検査につ

き異常値のメカニズムが書いてあるのがよい。

最後の“疾患と検査”という項目で、ある疾患、例えば心筋梗塞とか甲状腺機能亢進症とかの必要検査と経過観察に必要な検査が箇条書きされているのは大変に有用である。一目でわかるように記載されており、辞書のように診療中に使えるのが大変ありがたい。

更に、細かい点であるが付録に医薬品の臨床検査に及ぼす影響などの情報が記載されている点も行き届いた配慮である。

いずれにせよ、本書は日常診療を支援する本として、病棟のナースステーションや外来診療室の一角に欠かせない最新版臨床検査ガイドラインである。

● B6 頁752 図60 表160 1999
 定価(本体4,600円+税) 円400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)